

## B-1

### 宮古語諸方言における前舌的な母音対応とその通時的由来

尹 熙洙(総合研究大学院大学 先端学術院 博士後期課程)

#### 要旨

宮古語(沖縄県宮古島市・多良間村)には、方言によって ja(a), e(e), i(i) などの反映を持つ母音対応(本発表では「前舌的な母音対応」と呼ぶ)が存在する。先行研究では、前舌的な母音対応に対して宮古祖語 \*Cja(a) が再建されてきた。しかし、そのような再建では、長い前舌的な母音対応(\*Cjaa 相当)が語頭にも見られることや、短い前舌的な母音対応の祖形として再建される \*Cja が多良間方言において Ce だけではなく Ci や Ca でも反映されることが説明できない。

本発表では、長い前舌的な母音対応に対して宮古祖語 \*(C)εε、短い前舌的な母音対応に対して宮古祖語 \*Cεε, \*Cε, \*Cæ の再建を提案する。宮古祖語の \*εε は、一部の環境においては各方言群で独立的に短母音化した。短母音化によって生じたものを除いた短い前舌的な母音対応は全て \*ε または \*æ に由来するが、これらの母音は沖縄語から宮古祖語へ借用された古い借用語にしか存在しなかったと考えられる。

#### 1. はじめに

##### 1.1 本発表の背景と目的

宮古語は、宮古諸島(沖縄県宮古島市・多良間村)で伝統的に話されてきた言語である。各集落では異なる方言が話されており、宮古語には約 30~40 の方言が存在するとされる(ペラール・林 2012: 13)。

宮古語諸方言は、多良間・水納方言群と池間・伊良部方言群、そしてそれ以外の方言(中央宮古語諸方言)に分けられるが(Pellard 2009: 294)、これらの方言群の間には、方言によって ja(a), e(e), i(i) などの反映を持つ母音対応(本発表では「前舌的な母音対応」と呼ぶ)が存在することが知られている。例えば、中央宮古語諸方言(大神など一部方言を除く)の Cjaa に対し、多良間・水納方言群では Cee、伊良部・仲地方言では Cii の反映が見られる(C は任意の子音)。宮古祖語の再建に触れた今までの研究では、前舌的な母音対応に対し、祖形として \*Cja(a) が再建されてきた(Pellard 2009: 298–299; ペラール・林 2012: 15–19)。

本発表では、長い前舌的な母音対応(反映において母音が長い場合、先行研究の \*Cjaa 相当)の宮古祖語における祖形として \*(C)εε を、そして短い前舌的な母音対応(反映において母音が短い場合、先行研究の \*Cja 相当)の祖形として \*Cεε, \*Cε, \*Cæ を再建することを提案し、新しく再建された母音 \*εε, \*ε, \*æ の由来について考察する。

##### 1.2 本発表で扱う方言とデータ

本発表では、中央宮古語諸方言のうち、前舌的な母音対応において主に広母音 /a/ の反映を示す方言を便宜上「中核諸方言」と称する。中核諸方言のデータとしては、皆愛方言(セリック 2018)及び砂川方言(セリック 2022)の語彙集を利用する。非中核方言では、多良間・水納方言群(以下、「多良間」と呼ぶ)を代表する方言として、仲筋方言の辞典(渡久山・セリック 2020)を利用する。

また、必要に応じてネフスキー資料の英訳(Jarosz 2015)や、池間方言西原下位方言の辞典(仲間ほか 2022)、『宮古伊良部方言辞典』資料編「宮古 28 集落の音韻調査」(富浜 2013: 886–893)を引用する。比較のために、沖縄語首里方言(国立国語研究所編 1963)及び伊江島方言(生塩 2009)の辞典も用いる。

## 2. 旧説の問題点

Pellard (2009) は、(1a)–(1e) のような再建を提示している。(1a)–(1c) は、ペラール・林 (2012) でも同様の再建がなされている。このような再建を本発表では「旧説」と呼ぶ。

	中央	中核	池間・伊良部		多良間	宮古祖語
	大神	平良	池間	長浜	塩川	
(1a) 「昔」	ikɛɛm	ŋkjaaŋ	ŋkjaaŋ	ŋkjaaŋ	ŋkeɛŋ	*ŋkjaaŋ
(1b) 「無い」	nɛɛn	njaaŋ	njaaŋ	njaaŋ	neɛŋ	*njaaŋ
(1c) 「一人」	tafkeɛ	tavkjaa	taukjaa	tavkjaa	tookɛɛ	*tavkjaa
(1d) 「未明」	sɛɛka	sjaaka	sjaaka	sjaaka	ɛɛeka	*sjaaka
(1e) 「もっと」	mmɛpi	nnapi	mmjapi	mmjapi	mmɛpi	*mmjapi

(データは Pellard 2009: 299 より、表記は一部修正、下線は発表者による)

下線部の前舌的な母音対応において、jaa の反映を示す方言が ee などほかの反映を示す方言より多いため、祖形として宮古祖語 \*jaa を再建することは、節約 (parsimony) の観点からすれば合理的である。しかし、旧説の再建では、前舌的な母音対応が語頭においても見られるという点を説明することが困難である。例えば、「歌」は中核 aagu、多良間 eegu という反映を示すので、旧説の再建では \*jaagu のような祖形を想定することになるが、\*jaa という音の連続は、名詞 \*jaa 「家」で実際観察されるように、宮古語の全ての方言において jaa という反映を持ち、\*jaagu? 「歌」の再建と矛盾する。

また、宮古祖語に \*Cja が存在しなかった可能性があることが問題点となる。宮古語の「明日」と「柱」は、北琉球語群の特徴的な改新である「順行硬口蓋化 (progressive palatalization, \*C > \*Cj / i\_ {e, a, o})」と「語中 \*ei 脱落」(\*s で終わる語幹を持つ動詞の音便語幹及び日本語のシク活用に相当する形容詞語幹末では必ず脱落、名詞では散発的か)の音変化を経験していることから、北琉球から(恐らく琉球王国の行政言語として威信的地位を持っていた沖縄語首里方言から)宮古祖語への非常に古い借用と考えられるが、これらの語では、現代首里方言の te (< \*te) が宮古語の ts に (2a)、そして j (< \*rj) が宮古語の r に対応している (2b)。なお、(2c) の「苦瓜」も「柱」と同様に、\*rj を r で借用している(もし「苦瓜」が借用語でないならば、宮古語には †goorja または †gaurja のような反映を持つ方言が存在することが期待される)。このような子音対応は、宮古祖語に \*Cj のような音の連続が存在しなかったことの傍証といえる。

	宮古語(中核)	宮古祖語	借用元言語において再建される祖形
(2a) 「明日」	atsa	*atsa	*asita > *ʔacitea > *ʔateca (cf. 首里 ʔateca)
(2b) 「柱」	para	*para	*pasira > *pacirja > *parja (cf. 首里 haaja)
(2c) 「苦瓜」	goora~gaura	*gaura	*ʔgauri + *-ja > *ʔgaurjaa (cf. 首里 goojaa)

最後に、宮古語史における短母音化が考慮されていないという問題が指摘できる。例えば、(1e) の「もっと」は、ネフスキー資料には前舌的な母音対応の部分が長母音であったことから(平良 nnjaapii、多良間 mmjaapii)、各方言群において独立的に短母音化が生じたことが示唆される。その場合、宮古祖語においては長母音相当の祖形を再建する必要がある。短母音化の問題に関しては後述する。

### 3. 長い前舌的な母音対応の祖形とその由来

#### 3.1. 長い前舌的な母音対応の祖形

中核 Cjaa :: 多良間 Cee (:: 伊良部 Cii) の母音対応に対して宮古祖語 \*Cjaa を再建する旧説の問題点は、\*jaa の代わりに長い単母音 \*εε を再建することによって解決できる。この \*εε の音声実現が [e:] ではなく [e:] だったという確証はないが、琉球祖語 \*e (> 宮古語 i) との混乱を避けるために、本発表では \*εε を採用した。

旧説では、宮古祖語の \*Cjaa が一部方言で単母音化して Cee や Cii になったという説明がなされたが、本発表の再建では逆に、\*εε から aa への広母音化(lowering)を中核諸方言の改新とする。前舌母音 \*εε は、本発表の再建においては先行子音を硬口蓋化させていたとされるため、先行子音が存在した場合は、\*Cεε [Cie:] > \*Cjaa [Cia:] のような変化が生じた。

このような説明では、語頭など先行子音を伴わない場合に、\*εε [e:] > \*aa [a:] という母音下降だけが生じることが期待され、「歌」(中核 aagu, 多良間 eegu < 宮古祖語 \*εegu)において実際観察される反映と一致する。

更に、本発表で再建する \*εε は、文献資料によっても支持される可能性がある。清の徐葆光が著した『中山伝信録』(1721 年)には、宮古諸島の名称について「始為宮古、後為迷姑、今為麻姑」と記されており、「麻姑」より「迷姑」が古い形であることを示している(仲宗根 2012: 144)。「麻姑」「迷姑」という漢字表記が成立した経緯は定かではないが、「麻」は広母音を持つ音節、「迷」は前舌母音を持つ音節を記したものと考えてもよいはずである。「宮古」(中核 mjaaku, 多良間 meeku < 宮古祖語 \*meeku)は長い前舌的な母音対応を示す語の一つなので、『中山伝信録』の記載は広母音を持つ中核諸方言の mjaaku が改新であることを支持するものといえる。

#### 3.2. 宮古祖語 \*εε の由来

長い前舌的な母音対応の由来の一つに、(1d) の「未明」(宮古祖語 \*seeeka < \*sajaka) のような、3 音節(現代宮古語諸方言の 3 モーラ相当)以上の語における \*aja の縮約(contraction)が知られている。本発表では、\*Vja (V は任意の非円唇母音) > 宮古祖語 \*εε という音韻規則を提案する。

なお、上記の音韻規則では説明できない \*εε が再建される語に「昔」(中核 ηkjaan, 多良間 ηkeen < 宮古祖語 \*mikeeni)と「蜀黍」(ネフスキー平良 upu-gam または jamatu-upu-gam, 池間 hu-gjan, 多良間 upu-geem < 宮古祖語 \*upu-geemi)がある。

「昔」の語源は不明であるが、沖縄語の歴史において「語中 \*ei の脱落」が存在したことを考えると、「昔=LOC」に対応する \*mukasi=ni > \*mukaci=nji > \*mkanj のような沖縄古語から宮古祖語への借用である可能性が考えられ、\*piᵛgasi 「東」においては実際似たような変化が文献上確認できる。『おもろさうし』には「にしたけ」と対をなす「ひかたけ」(13・955)や、「にしかない」と対をなす「ひかかない」(20・1344)が見られ、『沖縄語辞典』の hwidzahoo 「東の方。農村で多くいう語」の hwidza- に対応することが指摘されている(Serafim & Shinzato 2021: 172, 357–358)。更に、沖縄語を記した中国資料に見られる「東」の意の「加尼」(\*ᵛgjanj?)は、先述の \*mkanj と同じく、「東=LOC」に対応する \*piᵛgasi=ni > \*pjiᵛgjaei=nji > \*ᵛgjanj と変化している可能性がある(沖縄語で語頭 \*pji の脱落は、\*pjiteo 「人」と \*pjiteorji 「一人」に見られる)。

「蜀黍」は、琉球祖語の \*kimi 「黍」と同根であるとすれば、\*-geemi は \*kimi > \*kjimj という沖縄古語の連濁形 \*-gjimj (首里方言 maa-dziᵛj 「黍」参照)に由来すると考えられる。その場合、宮古語の「昔」と「蜀黍」は、沖縄古語で \*Nj で終わっていた語の借用という共通点を持つ。

以上の議論からは、沖縄古語の語末 \*VNj が宮古祖語に \*εεNi として借用されたということになるが、その具体的な経緯として、本発表では沖縄古語の \*VNj が最初 \*ViN{i, u} として借用され、\*Vi > \*εε の単母音化(及び \*i, \*u > \*i の中舌化)によって宮古祖語 \*εεNi になったと考えている。

単母音化 \*Vi > \*εε を想定する根拠は、まず「くしゃみの呪文」(ネフスキー平良 kuskja, 多良間 kuskee < 宮古祖語 \*kusikεε)である。ネフスキー資料でこの呪文は、「糞食らえ」の意の沖縄語(『混効験集』に「くそくはい」、『沖縄語辞典』に kusu kwee とあり、同様にくしゃみをした時の呪文として使われる)に比較されているため、本発表では \*kusikεε の語源に関して、沖縄古語 \*kusokwai を借用した \*kusokai の音位転換形 \*kosukai に由来するものとする(宮古語 anga と首里方言 angwaa の比較から見られるように、沖縄古語 \*kw, \*ɔgw は宮古祖語 \*k, \*g として借用される)。

もう一つの根拠は、『朝鮮王朝実録』「燕山君日記」の多良間人漂流民に関する記事(1497年)である。当該記事によると、多良間人漂流民たちが乗っていた船には、水稻が載せられており、その水稻の出所を質問したところ、漂流民たちは「也麻老風加音島」と答えたという(関 2021: 216–218)。この「也麻老風加音島」は未詳とされているが、本発表では「也麻老風加音島」(朝鮮漢字音 *ya.ma.lwo.phwung.ka.um.two*)を島の名前ではなく、宮古祖語 \*jamatu-upu-geemi=du 「蜀黍=FOC」に対応する形(穀物の出所ではなく名前を答えた)と考える(先述の jamatu-upu-gam 参照、jamatu 「日本」と「蜀黍」の意味的な関係が定かではないため、jamatu- は「日本」ではなく jaama=nu 「八重山=GEN」の祖形から転じた可能性あり)。当時の朝鮮漢字音では、im を書き表すことができなかった(現代韓国語で用いられる漢字音の im は lim, zim などに由来する)、*ya.ma.lwo.phwung.ka.um.two* の um /im/ は [im] の音を記したものと考えられる。

最後に、「勝負」(中核 mjaa, 多良間 mee < 宮古祖語 \*mεε < \*mεewi < \*mijaw-i?)のように、語源的に宮古祖語 \*εewi が期待される場合にも実際の反映は \*εε と同じであることに注意されたい。これは、宮古祖語 \*ewi の場合とは異なる(後述)。

## 4. 短い前舌的な母音対応の祖形とその由来

### 4.1. 宮古語史における短母音化

先述の「蜀黍」や「くしゃみの呪文」のように、宮古祖語 \*εε の各方言における反映で、長母音の jaa, ee ではなく短母音の ja, e などが見られる場合がある。そのような短母音化が全ての方言で生じている場合は、母音対応は短い前舌的な母音対応に見えるが、長い前舌的な母音対応と同じように \*εε を再建しなければならない。

宮古語で短母音化は、主に語末において、または超重音節(CCVV や CVVC など)の回避のために生じていると考えられる。特に、接尾辞 \*-ja によって派生された動作主名詞の語末では短母音化が生じる。「豊見親(首長の尊称)」などがその例である(中核 tujumja, 多良間 tujume < \*tujumεε < \*tojomi-ja)。

超重音節の回避のための短母音化は、「番所」(ネフスキー平良 bummjaa)が良い例であるが、この語は buu-mmi 「苧麻績み」と jaa 「家」からなるにも関わらず、†buummjaa ではなく bummjaa になっている。これに関しては、宮古語史のとある段階で音素配列的な制約が原因で短母音化したと考えられる(buummi の場合は CVV.CCV の音節分けによって超重音節を回避できるが、†buummjaa は buum.mjaa だと CVVC、buu.mmjaa だと CCVV の超重音節が生じる)。宮古祖語 \*εε を含む超重音節回避の短母音化の例は、「羨ましい」(中核 vvjamas-, 多良間 veemas- < 宮古祖語 \*wireemasi- < \*urajamasi-)が挙げられる。多良間方言では短母音化ではなく、子音を vv から v にすることによって超重音節を回避しており、この短母音化が宮古祖語の段階ではなく、各方言群で独立的に生じたことの証拠となる。

なお、宮古祖語 \*εε に由来する短い前舌的な母音対応を示す語のうち、非常に興味深い例として、「もう」(中核 *nnja*, 多良間 *mme* < 宮古祖語 \**minεε*)と「もつと」(中核 *nnjapi*, 多良間 *mmepi* < 宮古祖語 \**minεepi*?)が挙げられる。これらの語は、方言によって語頭の子音が *nn* または *mm* で異なるが、宮古語の多くの方言で「胸」(宮古祖語 \**mini* < \**mune*)が *mmi* の反映を示すことに対し、\**m*{*i, u*}*na* > \**mina* > †*mma* のような順行同化の例は見られないことを考えると、\**min* > \**mn* が *nn* または *mm* のいずれかで反映されるかは、後続母音の前舌性に依存するはずである。したがって、旧説のように \**ja(a)* を再建すると、\**min* > \**mn* の異なる反映を説明することが難しくなる。

#### 4.2. 宮古祖語 \*ε の再建と由来

宮古祖語 \*εε に由来する短い前舌的な母音対応は、多良間方言で *e* の反映が見られることがその特徴である。しかし、中核諸方言の *Cja* と多良間方言の *Ci* が対応する語も存在する。下記 (3a)–(3d) がその例である。

	中核	多良間	宮古祖語
(3a) 「鬱金」	<i>ukjaŋ</i>	<i>ukiŋ</i>	* <i>wikeni</i> < * <i>uken</i> { <i>i, u</i> }?
(3b) 「海葡萄」	<i>ŋkjaf</i>	<i>ŋkif</i>	* <i>mikefi</i> < * <i>m</i> { <i>i, u</i> } <i>kεku</i> (cf. 伊江島 <i>ŋkiku</i> )
(3c) 「池間島」	<i>ikjama</i>	<i>ikima</i>	* <i>ikεma</i> < * <i>ikema</i> ?
(3d) 「少ない」	<i>ikjara-</i>	<i>ikira-</i>	* <i>ikera-</i> < * <i>ekera-</i> (cf. 首里 ? <i>ikira-</i> )
(3e) 「商人」	<i>akjaada</i>	<i>akeoda</i>	* <i>akewida</i> < * <i>akeuda</i> ? (cf. 首里 ? <i>ateoodaa</i> )

(3b) は、沖縄語伊江島方言 *ŋkiku* との比較から、短い前舌的な母音対応の部分が琉球祖語 \**ke* に遡る。(3d) も、琉球祖語 \**iki*, \**ike*, \**eki* は全て首里方言で *itei* になるので、?*ikira-* は琉球祖語 \**ekera-* の反映と考えられる。沖縄語を記した朝鮮資料『語音翻訳』(1501年)にも *yey.kyey.na.kwu /jekenaku/* とあり、沖縄古語 \**ekera-* の再建を裏付ける。

したがって、(3a)–(3d) の短い前舌的な母音対応は、全て琉球祖語 \**e* に遡るとするのが合理的である。しかし、継承語だと琉球祖語 \**e* > 宮古語 *i* の反映が期待されるため、本発表ではこれらの語が琉球祖語 \**e* > 沖縄古語 \**e* を持つ語を借用したものであるとみなし、宮古祖語 \**e* を再建する。宮古祖語 \**e* は、主に3音節以上の語の第2音節に見られる。

多良間方言で \*εε が *e(e)* の反映を示すことに対し、\*ε が *i* の反映を示すのは、長い *ee* > *e* の単母音化の前に短い *e* > *i* の上昇が生じたとすれば説明できる。これを利用して、多良間以外の方言で散発的な長母音化を起こした語の場合でも、正しい祖形を再建することができる。例えば、「糸瓜」(中核 *nabjaara*, 多良間 *nabira* < 宮古祖語 \**nabera*)は、そのような語の一つであると考えられる。

最後に、(3e) の「商人」は、多良間方言において非常に変則的な音の連続 *eo* を持つ語であるが、例外的に \*ε が沖縄古語の \**i* に由来するように見える(首里方言 ?*ateoodaa* 「商人」は、恐らく日本語からの借用語である ?*ateoodu* 「商人」に接尾辞 \**-ja* が付いたもので、宮古語の形は日本語とは対応しない最後の母音 *a* を持っているという点から、沖縄語から借用されたはずである)。これは恐らく、先述の沖縄古語 \**-gijmj* 「黍」が宮古祖語 \**-gεemi* (< \**-gεim*{*i, u*}?) になったのと同じ原因によるものと考えられるが(沖縄古語 \**?akjiCjdaa*?), 更なる検討を要する。

### 4.3. 宮古祖語 \*æ の再建と由来

短い前舌的な母音対応の一つとして、中核諸方言の Cja と多良間方言の Ca の対応がある。この対応を示す母音は、琉球祖語 \*a に遡り、沖縄古語の硬口蓋化阻害音の後、または硬口蓋化共鳴音の前に位置する。沖縄古語の硬口蓋化子音から予測できるため、本発表ではこの対応を示す語を沖縄古語から宮古祖語への借用とみなし、祖形として宮古祖語 \*æ を再建する。下記 (4a)–(4d) がその例である。

	中核	多良間	宮古祖語
(4a) 「鳥賊」	ikja	ika	*ikæ (cf. 首里 ʔitea < *ʔikja < *ika)
(4b) 「苦い」	ŋgja-	ŋga-	*niŋæ- (cf. 首里 ndza- < *njgja- < *niŋgja- < *niŋga-)
(4c) 「針」	piz (< pjaz?)	paɭ	*pæri (cf. 首里 haai < *parji < *pari)
(4d) 「走る」	pi-z (< pja-z)	pa-ɭ	*pæri-i (cf. 首里 har- < *parj- < *pæirj- < *pasir-)
(4e) 「漲水」	pjarumidz	—	*pæri-u midzi
(4f) 「荷川取」	ŋkjadurja	—	*niŋædureæ
(2b) 「柱」	para	para	*para (cf. 首里 haaja < *parja < *pæirja < *pasira)

(4c) と (4d) は、中核諸方言で広く i の母音が見られるが、(4c) の「針」は「宮古 28 集落の音韻調査」によると pjaz の反映を持つ方言が存在する(久松・友利・保良)。また、(4d) の「走る」に関しては、ネフスキー資料には平良の韻文(綾語)で pja-z が見られるとの記載があり、pja-z のほうが古い形であると考えられる。「走る」は、多くの方言で「行く」への意味変化を経験しているが、p に後続する \*æ が i で反映されるのは、「行く」への意味変化が最初に生じた方言においては規則的な反映で、新しい意味と共に pi の反映が他方言に伝播した可能性がある。

(4e) と (4f) は地名で、多良間方言のデータがなくても伝統的な漢字表記から \*æ を再建できる例である。特に、(4e) の「漲水」は、前部要素に琉球祖語の連体形 \*pasir-o 「流れる-ATTR」に対応する形式 \*pæri-u を含む点が興味深い。最後に、(2b) の「柱」は、沖縄語からの古い借用語であるが(先述)、第1音節の母音は沖縄古語の硬口蓋化共鳴音 \*rj に先行するにも関わらず、宮古祖語 \*æ ではなく \*a として借用されている例外的な語である。これに関しては、一つの語の中に前舌と後舌の広母音(\*æ, \*a)が共存しなかったという母音調和的な現象を想定し、古英語で生じた a 復元(a-restoration)に似た \*æ > a / \_Ca の同化によって説明できる可能性が考えられる(古英語の a 復元に関しては、Lass 1994: 41–44 参照)。

### 5. まとめ

長い前舌的な母音対応の祖形としては、主に \*Vja (V は非円唇母音) に由来する宮古祖語 \*εε が再建できる。短い前舌的な母音対応は、宮古祖語 \*εε の各方言群における独立的な短母音化や、沖縄古語からの借用語に見られる宮古祖語の母音 \*ε, \*æ に由来する。宮古祖語 \*ε は主に3音節以上の語の第2音節に見られる。宮古祖語 \*æ は沖縄古語の硬口蓋化子音に隣接する \*a に対応する(下表参照)。

沖縄古語(借用元)	宮古祖語(借用先)	沖縄古語(借用元)	宮古祖語(借用先)
*Cja (C は阻害音)	*Cæ	*VNj# (N は鼻音)	*εiN {i, u} > *εεNi
*aCj (C は共鳴音)	*æC	*VCjC? (C は子音)	*εuC > *εwiC?

## 6. 今後の課題と展望

本発表で提案する再建によって、沖縄古語の音声再建や、今まで語源不明とされてきた語の語源の解明が可能になる。例えば、宮古祖語 \*mikefi 「海葡萄」は、前部要素 \*mike が沖縄古語 \*mke- < 琉球祖語 \*muke- 「剥ける」に対応する可能性が考えられる(岩の表面に着生するため)。また、「くしゃみの呪文」に見られる \*ai > 宮古祖語 \*εε の単母音化と、「米」などに再建される琉球祖語 \*ai > 宮古語 az との矛盾を解消するために、後者を \*aji > \*azi > \*azi > 宮古祖語 \*azi という風に再建する必要があるが、これは語頭の琉球祖語 \*ij > 宮古語 zz のような変化が同様の経緯(\*j > \*z > \*z)を持つことを示唆する。

本発表では、前舌の \*εε, \*ε を再建しているが、これらの母音と対をなす後舌の \*ɔɔ, \*ɔ も存在した可能性がある。例えば、3音節以上の語において \*aja, \*ija などが宮古祖語 \*εε になったように、\*awa, \*oja などは \*ɔɔ になったかもしれない(多良間 mees- 「燃やす」、eetsbz 「泡」、eebz 「鮑」、eem 「闇」 < 宮古祖語 \*mɔɔs-, \*ɔɔ-tsibi, \*ɔɔbi, \*jɔɔmi < \*mojas-, \*awa-tsubu, \*awabi, \*jo-jami?)。沖縄古語の第2音節の \*e が宮古祖語 \*ε として借用されたように、第2音節の \*o は宮古祖語 \*ɔ として借用されたかもしれない(多良間 iteaf 「いとこ」 < 宮古祖語 \*itsɔfi?, cf. 沖縄古語 \*iteoku > 首里 ?iteuku)。このような可能性に関しては、今後の検討が必要である。

**謝辞** 本発表は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」サブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」の研究成果の一部である。

## 参考文献

- セリック ケナン(2018)「南琉球宮古語下地皆愛方言 —簡略記述・談話資料・語彙集—」『言語記述論集』10: 97-249.
- セリック ケナン(2022)「宮古語砂川方言の語彙集」『言語記述論集』14: 157-209.
- Jarosz, Aleksandra (2015) *Nikolay Nevskiy's Miyakoan dictionary: Reconstruction from the manuscript and its ethnolinguistic analysis*. Adam Mickiewicz University.
- 国立国語研究所(編)(1963)『沖縄語辞典』東京:大蔵省印刷局.
- Lass, Roger (1994) *Old English: A historical linguistic companion*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 仲間 博之・田窪 行則・岩崎 勝一・五十嵐 陽介・中川 奈津子(2022)『南琉球宮古語池間方言辞典』東京:国立国語研究所 言語変異研究領域.
- 仲宗根 将二(2012)「宮古の地名」を歩く (3) 地名の語る「宮古の歴史と文化」『宮古島市総合博物館紀要』16: 114-149.
- 生塩 睦子(2009)『沖縄伊江島方言辞典』沖縄:伊江村教育委員会.
- Pellard, Thomas (2009) *Ōgami: Éléments de description d'un parler du Sud des Ryūkyū*. École des Hautes Études en Sciences Sociales (EHESS).
- トマ ペラール・林 由華(2012)「宮古諸方言の音韻 —体系と比較—」木部 暢子(編)『消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』13-51. 東京:国立国語研究所.
- 関 周一(2021)『朝鮮王朝実録』にみえる奄美諸島と先島『国立歴史民俗博物館研究報告』226: 197-230.
- Serafim, Leon A. & Shinzato, Rumiko (2021) *The language of the Old-Okinawan Omoro Sōshi*. Leiden: Brill.
- 渡久山 春英・セリック ケナン(2020)『南琉球宮古語多良間方言辞典』東京:国立国語研究所 言語変異研究領域.
- 富浜 定吉(2013)『宮古伊良部方言辞典』沖縄:沖縄タイムス社.